

古楽オペラの鑑賞会

川口 ひろ子

コロナ禍で閉鎖中の東京文化会館会議室が時間制限など条件付きで使用可能となり、念願のオペラサークル六月例会が開催された。

上映されたDVDは、二〇〇六年インスブルック古楽祭で上演されたルネ・ヤーク・ブス指揮によるモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」。放蕩三昧のスペインの貴族が神の怒りに触れて地獄に落とされるお話しだ。この舞台は、古楽器奏法による革新的な公演の魁とも言われ、オペラの未来図を明確に描き出した作品としての評価が高い。古楽奏法の特徴と言えば何と言ってもテンポが速く、切れが良い進行だ。次に、演奏、歌、演技ともにウエットで大袈裟な感情表現を嫌い、表現がいささか素っ気ないこと。この特徴をストレートに演じてみせてくれたのはドン役の若手ヨハネス・ヴァイサー君だ。口説きのシーンでも男の色気など微塵もなく魅力の乏しい青年の姿になり切っていた。

革新性は演出面でも多彩だ。一番印象に残ったのは、ドン・ジョヴァンニを好色な中年貴族ではなく、大人社会を引っ掻き回す未熟な良家の不良息子として描いている点だ。とても二〇〇三人の女性を口説き落とす過去を誇る放蕩者とは思えない。脇役の小間使いツェルリーナの準主役的な活躍も意外だった。アリアに合わせて踊って見せて立派に物語の進行役を務めていた。このインスブルック公演以来十五年、国内外で様々なオペラ公演が開催された。今日モーツァルトの演奏に関しては、総て古楽器と言う訳には行かないが、折衷型と言うかモダン楽器を使つての古楽風演奏が主流となった。やはり時代は動いている。

地味で味気ない古楽オペラを「まるで学芸会の様な」と評して遠ざけていた私は、十五年前のこのDVDの存在をすっかり忘れていた。今回じっくり鑑賞する機会得て、改めて自分の鑑賞眼の偏りに気づいた。プレゼンターのI氏に解説の追加をお願いしたかったが、時節柄質疑応答の時間も省略され、早々の解散となった。